

残り40日。その3

前にも紹介した「言志四録」とは、佐藤一斎が四十年にわたって書き残した、有名な自己啓発・哲学書です。

言志四録は、以下の四書から構成されています。

言志録(げんしろく) 言志後録(げんしこうろく) 言志晩録(げんしばんろく) 言志耄録(げんしてつろく) 以上の四書を総称した名称が「言志四録」です。

佐藤一斎(1772～1859年)とは、美濃(岐阜県)岩村藩家老・佐藤信由の子として江戸藩邸で生まれ、幼少の頃から聖賢の経書に親しんだとされています。

二十二歳の時、大学頭・林簡順の門を叩き、儒学で身を立てることを決意し、三十四歳の時、この林家の塾長に抜擢されました。

佐藤一斎が七十歳のとき、大学頭だった林述斎が七十四歳で亡くなったため、今でいう東京大学総長の立場である、昌平黉(しょうへいこう)の儒官になり、日米和心条約の外交文書の作成にも関わっています。

門下生は6000人とも言われており、朱子学、陽明学と見識が広く、その両方から英雄が現れています。

陽明学からは、幕末の先覚者といわれる「佐久間象山」「横井小楠」らが現れ、佐久間象山の門下から「勝海舟」「吉田松陰」らが輩出しました。

その、吉田松陰の「松下村塾」からは「高杉晋作」「木戸孝允」「伊藤博文」ら、維新に関わった志士たちが登場したのです。

また、「西郷隆盛」は言志四録を愛誦し、その中から101条を選んで「南州手抄言志録」として残しているのです。

「少(しょう)にして学べば、則ち壮(そう)にして為すこと有り。
壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」

少年のときに学んでおけば、壮年になってから役に立ち、何事かを為ことができる。壮年のときに学んでおけば、老年になっても気力が衰えることはない。老年になっても学んでおけば、ますます見識も高くなり、社会に役立つこととなり、死んでからもその名は残る。

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只だ一燈を頼め」

暗い夜道を歩く時、一張の提灯をさげて行くならば、如何に暗くとも心配しなくてよい。ただその一つの提灯を頼りにして進むだけでよい。

高い志と熱い魂をもって、その志と魂をよりどころにしながら進んでください。

